

令和7年度(2025年度)

病害虫発生予察情報 第13号

注意報第7号

北海道病害虫防除所 令和7年(2025年)7月18日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

シロオビノメイガが早期に飛来！ てんさいなどでは今後の被害に注意！

本年、長沼町の予察灯において、平年よりかなり早い6月下旬にシロオビノメイガ成虫が確認されました。また、7月上旬より長沼町のてんさい予察ほ場(無防除)、道央及び道南のてんさい圃場(慣行防除)においても本種の幼虫の発生が報告されています。本種の成虫誘殺は平年より1か月以上早く(表1)、てんさいにおける発生も平年より早いため、今後の被害に注意が必要です。

シロオビノメイガは、てんさい、ハウレンソウ、ウリ類の害虫として知られています。成虫(写真1)は7月頃からみられ、9月中旬に最も多くなります。てんさいにおいて、雌成虫は卵を葉裏の葉脈沿いに計80~100粒程産卵します。幼虫(写真2)は糸を張って葉を折り曲げ、その中に潜っており、ふ化直後の幼虫は表皮を残して葉肉を網目状に食害します。生育が進むと葉柄や中肋を残して食害し、不規則な穴をあけます。

本種は飛来性であることから、高温年の早期に多飛来すると、てんさいで世代を繰り返し増殖し、葉を食い尽くすほどの大きな被害をもたらすことがあります。また、本種はヒユ科の雑草で増殖が可能であることから、ほ場外から繰り返し飛来して栽培後半まで被害が発生する可能性があります。

札幌管区気象台発表の7月10日付け1か月予報によると、向こう1か月の気温は高くなると予報されています。

このことから、未だ被害を認めていない地域においても、今後、成虫による産卵や幼虫による加害が活発化することも危惧されます。

以上のことから、ほ場観察につとめ、本種による被害を認めた場合には、登録のある農薬を用いて茎葉散布による防除を実施してください。

1. 発生地域 全道

2. 発生期 早

3. 注意報発令の根拠

- (1) 長沼町の予察灯で6月23日にシロオビノメイガの初誘殺が確認された。平年より46日早い初発(表1)で、平成23年に調査を開始して以降、最も早い初発である。
- (2) 7月10日付け札幌管区気象台発表の1か月予報によると、向こう1か月の気温は平年より高くなると予報されている。
- (3) 平年より飛来時期が早いため、世代を経過する可能性がある。

4. 防除対策

- (1) 幼虫の加害時期に薬剤を散布する(表2)。ヨトウガに対して防除を実施していても本種の被害が抑えられないことがあるため、本種に登録のある薬剤を選択する(表2)。

表1 長沼町(農業試験場)の予察灯におけるシロオビノメイガの初発期

	本年	平年	平年比
初誘殺日	6月23日	8月8日	46日早



写真1 シロオビノメイガ成虫



写真2 てんさいにおける幼虫と被害

表2 てんさいのシロオビノメイガに対して使用可能な農薬一覧

殺虫剤系統(RACコード)	農薬の種類	有効成分濃度	希釈倍数 使用量	使用時期	本剤の 使用回数	総使用回数
スピノシン系(5)	スピネトラム水和剤	11.7%	5000~7500倍	収穫前日まで	2回以内	2回以内
ネライストキシシン類縁体(14)	カルタップ水溶剤	75.0%	1500倍	収穫7日前まで	4回以内	4回以内
ベンゾイル尿素系(Ⅷ)	フルフェノクスロン乳剤	10.0%	4000倍	収穫7日前まで	4回以内	4回以内
	ルフェヌロン乳剤	5.0%	3000倍	収穫14日前まで	2回以内	2回以内
ジアミド系(28)	フルベンジアミド水和剤	20.0%	5000~6000倍	収穫前日まで	2回以内	2回以内
	クロラントラニリプロール水和剤	5.0%	4000~5000倍	収穫前日まで	2回以内	2回以内
メタジアミド系(30)	プロフラニリド水和剤	5.0%	2000~4000倍	収穫7日前まで	3回以内	3回以内

令和7年7月17日現在